年齢層のある子どもたちの紙工作における支援プログラムの一考察
―夏休み体験教室の事例を通して―

中　野　隆　二

A Study of Supporting Program with Paper Crafts for Age Group Children
−A Case through Classroom Experiences in Summer Holidays−

Ryuji Nakano

はじめに

本研究にあたって，夏休みの期間に子どもたちの体験教室が設けられ，芸術・文化に関する多様なジャンルを設置し，多くの子どもたちが学校の教室とは違った体験によって感動させようとするねらいのものについて取り扱った支援活動の内容である。これはNPO法人古賀市文化協会（以下，文化協会と記す。）[※1]が計画をたてたもので，市民全体の子どもたちに呼びかけ，希望者を募り，実施している。この計画は，子ども育成会[※2]とは別に，芸術・文化に触れさせ，子どもの育成のひとつとして支援するもので，昨年（2014年）度より実施され，本年（2015年）度で２回目である。この体験教室は教室28科目が設定されており，本研究では「工作教室」として支援したものである。これからも実施され継続するということ，あるいは他の場所や機関において実施することを考え，年齢幅のある子どもの紙工作に対する在り方についてプログラム化することを考えたものである。初年度の実践をふまえ，２年目に修正を加え，計画を立て，プログラムとして行なった。

１．目　的

本研究の在り方は，小学校に於ける教室とは違い，１つの教室に幼児から６年生までを一同に集め，実施するものである。実際上，発達の途上にある子どもたちがそれぞれ違った行動をすることは，教育・心理分野によって明らかであるが，当然ながら美術・工作の表現技術も年齢によって大きな違い，差がある。本研究では，成長発達を見守り，子どもの表現を充たすこと，子どもの現れかたを大切にしていくことを常に頭に置いて対応しなければならないと考えたものである。

紙工作は，子どもにとって，熱中すると楽しいものである。しかしながら，最初は取っ付きにくいものである。なぜならば，自分が自ら作りたいものがあれば，自然と足がむくものであるが，日頃の日常生活において，必要性がなく，その興味らしさが薄れているからだと思われる。もともと工作は，日頃の必要性から発祥しているものである。必要性と興味を覚えれば，熱中して，新たな発想を遂げ創造して行く。これが，子どもにとって将来へ，生きて行く大切な要素で，糧となると考えるのである。こういったコンセプトに基づいて，子どもの成長の糧となる支援として，本研究のプログラムをつくり，実践するものである。

本研究では，年齢幅のある子どもたちに，ひとりひとり好き勝手に制作させると「教室」の意味が薄くなるという考えから，一斉に行なうこととする。段階を設け，ひとつずつ制作し，そのなかに子どもたちの個性を芽生えさせる。難しいことばかりするのではなく，やさしいものから，徐々に，技術を要するものへ子どもたちに緊張感をもたせ，また，やさしいものへと転換させ，緊張感を緩和させる。そして，教室だけで終わるのではなく，家に持ち帰って，工作の新たな面白さを継続させるというねらいである。

２．第１回 2014年度について

２-１　計画

夏休み体験教室は，文化協会では初めての試みであるため，古賀市の小学生，中学生対象に5,000人分の申込み用紙の準備を行い，実施予定は７月23日から８月９日の16日間，22教室を設定している。「工作教室」では，15人を募集し，２日間つづけて行なう予定とし，実施指定日は７月24日，25日の２日，それぞれ午後１時30分から３時30分までの２時間を文化協会が設定した。

計画に於いて，子どもたちへのモチベーションをもたせるために，紙の材料をいろいろ揃え，特に，両面色違い造形紙（商品名：カラードフォルム，日本色研事業）

（以下，カラードフォルムと記す。）を使用する。用具についても，紙の加工の必需品である「はさみ」「のり」「ホッチキス」「セロテープ」，模様等をかき込む「マーカー12色」，片付けのための「ビニール袋」を支援者側から人数分準備し，子どもたちの準備はしないでよいこととした。制作の出来上がり目的として「とびだす　どうぶつえほん」として，手順および内容については，以下の通りである。

⑴　挨拶，紹介／（準備）紹介貼り紙。
⑵　材料および用具配布／（準備）白い画用紙（Ｂ６版）＝試作用。
　カラードフォルム（Ｂ４版・５枚セット），用具は上記のもの。
⑶　興味の導き，「うごき」の見本提示法による面白さの提案。
　開いたり，閉じたりして。（図４．の見本）
⑷「試作」ためそう。
　折って，切って，広げて，折り返す，白い画用紙で。（図１～４）

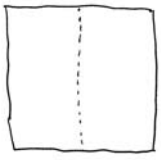
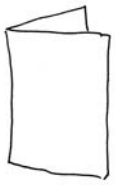

図１．白い画用紙　　図２．二つに折る

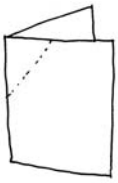
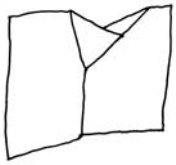

図３．角を折る　図４．広げてクセをつけ広げる

⑸　カラードフォルムを使って
　「ぱくぱく」画用紙を開いたり閉じたり

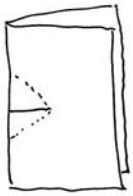
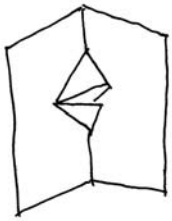

図５．２つに折って，切る　　図６．開いて山折り谷折り

⑹　マーカーで描き，何かを表そうよ。

図７．例「ヒヨコさんだよ！」

⑺　口のうごきのバリエーション「ガウー」

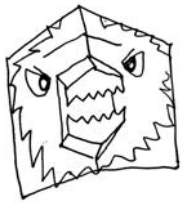

図８．例「ライオンだよ！」

⑻　口のうごきのバリエーション２　「大きな口のガウー」

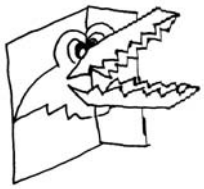

図９．例「ワニさんだよ！」

⑼　最後に安心感をもたせるもの，簡単で開くと立体感のおもしろさ　「にょきー」

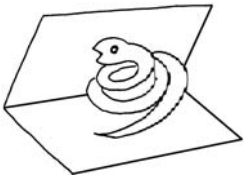

図10．例「へびだよ！」

⑽　４つ以上のカード作品を貼り合わせて，「とびだす　どうぶつえほん」にする。

図11．「えほん」にする

⑾　工作の継続として，未使用のカラードフォルムをプレゼント。
⑿　かたづけ。（準備）ビニール袋２枚（作品・紙の残り入れ，紙くず入れ用）
以上の内容の計画である。

２-２．結果

文化協会がこの計画のために子どもたちを募ったところ，70名余の応募があり，人数の予定を変更せざるを得なければならないようになった。15名の２日連続を15名

＋15名，合計30名とした。１日目の参加は，１年生４名，３年生７名４年生２名，６年生１名の計15名であった。しかしながら，２日目は，小学１年生７名，２年生１名，３年生４名，４年生２名，５年生１名，計17名で，２日間で６歳から12歳までの子どもたちの合計32名となった。計画について，時間と人数の変更によって，「えほん」制作までは行き着かないとして，予定を変更し，基本計画案にもとづいて，できるところまで行なった結果，次のようなことであった。

①　材料について興味をもった。
裏表の色違いの画用紙に，初めて見る子どもは不思議そうに，裏表を返してみる。
色でイメージすることが伺える。（図12．参照）

図12．カラードフォルムに興味を抱いている様子

②　子どもたちは，「うごき」に関心をもった。
③　工作の切る行為は５歳からよくできた。
④　切る，折る，曲げるといった工程の３つまでは５歳以上できた。
⑤　４つめの工程になると個人差があった。
⑥　切って折ったものへ，よりイメージ表現として描くことを，ほとんどの子どもたちが興味を持って，マーカーでかたちを表し，塗る子どもも見られた。

図13．マーカーで描く興味性

⑦　計画⑻　口のうごきのバリエーション２「大きな口のガウー」は３～４名の子どもしか作れず，大半の子どもたちにとってむずかしい課題であった。
⑧　残りの材料を返そうとする子どもに持ち帰ってよいことを知らせると，殆どの子どもたちが喜んだ。これは家庭への継続になるのではないかと考えられた。
ここでの問題は，材料・用具等を全部準備したことは，支援に負担がかかり過ぎた。特に無料提供した「カラードフォルム」の負担が大きいことであった。

３．第２回 2015年度について

３-１　計画のコンセプトとしての段階案

2014年度の第１回の計画と子どもたちの興味性と制作進展の実際の経験から，計画を立直し，段階分けを考えた。

第１段階として，子どもたちへ興味をもつものの題材を提案する。手順よく説明すれば，５歳以上であればできる題材とする。具体的に提示し，身につけるもの，手にもつもの，あそぶものなどが考えられる。材料にモチベーションを持たせる。

第２段階として，工作の興味・関心を高めるものを提案する。紙工作の醍醐味は，切る，折る，曲げる，貼る，つなげるである。これに，「描く」を加えたもの。ここで考えられるものは，「うごく」である。平面のものが，切る，折るによって，さらに，うごく動きがあれば，興味や関心を子どもたちはもつだろうと考える。

第３段階は２段階の延長であるが，少し技術を要するものへと転換した題材とする。

第４段階は，緊張をほどく，難しさから安心感を抱く題材で，簡単に面白く，「うごく」を楽しめるものである。

第５段階は，家に帰って楽しめる工作である。これは，子どもに考えさせて作るのではなく，予め，工作の下絵を準備して，帰り際に，子どもたちに家でつくることを促し，継続させようとするものである。

以上のような方法論から，実際に行なう具体的な題材を考え，プログラムとするものである。

３-２．プログラム

プログラムは方法論から具体的な題材例を当ててみる。また，実際に，体験教室で行なうものとする。制作時間は２時間の設定である。具体的に題材を提示する。
第１段階　新聞紙を使った身につけるもの，手にもつもの
その１．題材名「へんしんぼうし」

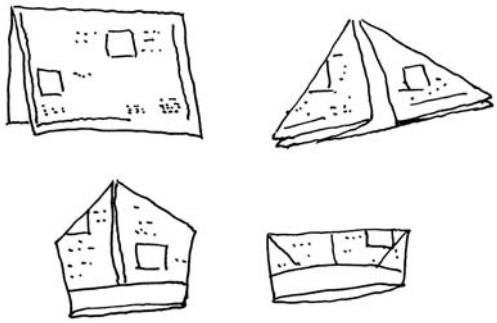

図14．「へんしんぼうし」のバリエーション例

その２．題材名「しんぶん紙の花」

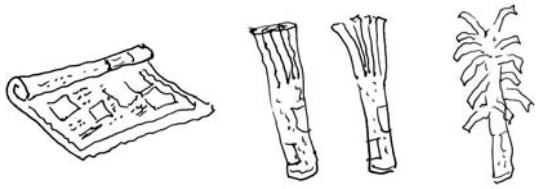

図15.「しんぶんしのはな」

第２段階　画用紙で切って折るもの　題材名「ぱくぱく」
（図５．６を参照。）

第３段階　少し難しく切って折るもの
その１．題材名「ガウー」

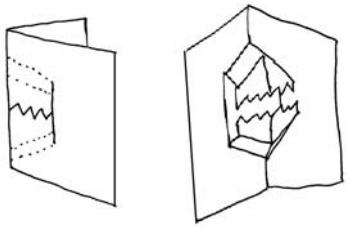

図16.「ガウー」

その２．やや難しく切って折って，貼るもの
題材名「グワーパクウ」

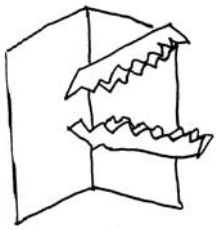

図17.「グワーパクウ」

第４段階　簡単に切ってうごくもの
題材名「にょきにょき」

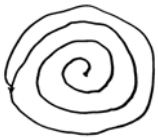

図18. 渦巻きを切る

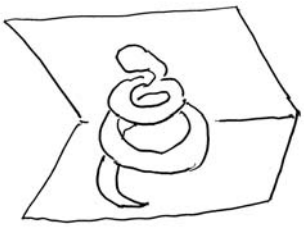

図19. 例「にょきにょき　へび」

第５段階　家で持ち帰って切って，折って作るもの
題材名「じょきじょき」

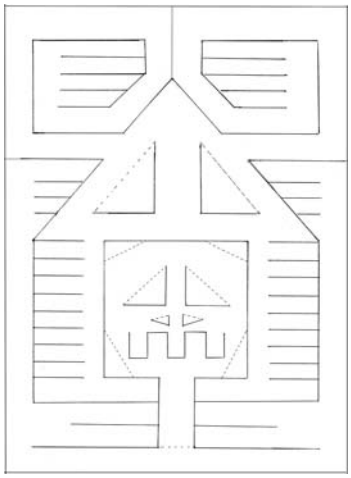

図21.「さて，なにができるかな？」

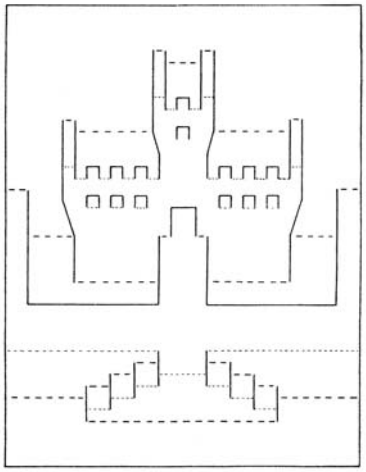

図22.「切って折ると，なにが？」

3-3．実施計画について

実施概要は以下の通りである。

実施日：2015年７月22日，24日の２日間
時間：10：00～12：00の２時間
場所：古賀市リーパスプラザ研修棟
対象：５歳～12歳　15名×２日　30名
子どもの持参品：新聞紙１日分，はさみ，糊，セロテープ，ホッチキス，マーカー
支援者の準備品：新聞紙，白い画用紙Ｂ４，はさみ，糊，セロテープ，ホッチキス，マーカー（12色）数組

４．実　際

文化協会が昨年のように子どもたちを募ったところ，応募が50名を越えた。工作は15名以内程度が支援できる範疇である。予定は30名であったが，文化協会が44名まで受け付けてしまった。従って，第１日目は21名，２日

目は23名，合計44名で，その内訳年齢・学年は次の通りである。５歳児１名，小学１年生５名，２年生15名，３年生５名，４年生14名，５年生３名，６年生１名の幅広い年齢の参加者である。

５．考　察

⑴　第１段階

その１．新聞紙を使った身につけるもの

題材名「へんしんぼうし」

子どもたちが興味をもつものとして身につけるものプログラムに「帽子」としたが，「へんしんぼうし」は，新聞紙を折りながらいろいろな形に変えて行くもので，その形にイメージされるものの帽子の名前を子どもたち皆で出し合うものである。

最初の形は「雪の子ぼうし」であったが，回答数が少なかったが，夏のため「日よけぼうし」と答えた子どもがいた。この段階では新聞折りのスタートを聞き耳している子どもと，していない子どもの差があり，何度も折り方を尋ねる子がいた。２～３回繰り返すと，全員揃った。２つ目は，「キャプテンハット」であるが，「おうさまのぼうし」と答える子どもが多かった。実は次の形が「王様の帽子」（図23）であった。とんがった形にそのイメージを抱いたようだ。次が，とんがったところをへこませて，「コックさん」或は「パン屋さんのぼうし」とした。次に，とんがりを折り返し「GIハット」であるが，「ハンバーガーショップのぼうし」である。折り返しをもどして，「おじいさんのぼうし」にした（図24）。最後に，丸い帽子で「チャイニーズぼうし」（図25）で，「へんしんぼうし」を終了した。

その２．手にもつもの　題材名「しんぶん紙の花」

今まで作った帽子の形で最も気に入ったものに直して，それをかぶって作ることとした。帽子の次は手にもつものとして「しんぶん紙の花」である。題材をいうのではなく，まず，新聞紙を横から巻くように示唆した。巻くという行為に子どもたちほとんどが興味を持った。（図23，26参照）。

次に新聞紙を丸めた口の部分を押しつぶして，破る（図25．参照）。なるべく細長くという助言を促した。「どれくらい？」「これくらい？」という質問が飛び交ったが，全員揃って次へ進んだ。紙の横目は，手で簡単に真直ぐ破れる（図27）ので，子どもたちにとって少し快感を覚えたのではないかと見て取れた。また，紙の性質が少し理解できたのではないかとも思われた。その後，巻いて破ったものを引き出すと「花」（図28．参照）に見えたので，子どもたちは自らすすんでつづきをして「花」にして喜んだ。

⑵　第２段階　画用紙で切って折るもの

題材名「ぱくぱく」

白い画用紙を取り出し，２つに折り曲げ，かどを斜め

図23．王様の帽子

図24．おじいさんぼうし

図25．チャイニーズぼうし

図26．新聞紙を巻く

図27．手でやぶる

図28．「しんぶん紙の花」

に折る（図３，４参照）ということを見せ，開くと「うごく」というきっかけから，２つに折り曲げた真中にハサミで直線３cmばかり切り込みを入れる。きったものを斜めに双方２つ折り込みを入れる。それを開いて，中心の折り目から折りくせをつけ，山折りと谷折りをすると，くちばしのように見える（図29.「ぱくぱく」）。これについて子どもたちのイメージは，マーカーを使って明確にしていった。それらは「ひよこ」「かえる」「かっぱ」「ひとのくち」「さる」といったさまざまなものが出来上がった。

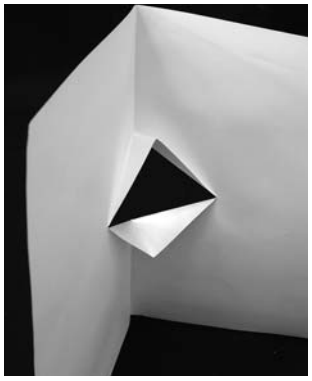
図29.「ぱくぱく」

⑶　第３段階　少し難しく切って折るもの

その１．題材名「ガウー」

２段階と同じように，画用紙を２つに折って，次に，ジグザグにハサミを入れた。これをすることに，少し手間取った。切った口を斜めに折り，さらに平行してきた双方を同じように折る。折って開き，折ったところをさらにクセをつける。それを広げ，「ぱくぱく」と同じように，山折り，谷折りしてさらにクセをつけてもとの２つ折りにすると，図30. 例「ガウー」になるが，これをスムーズにできたのは３分の１の子どもたちであった。低学年には少し難しいと思われた。

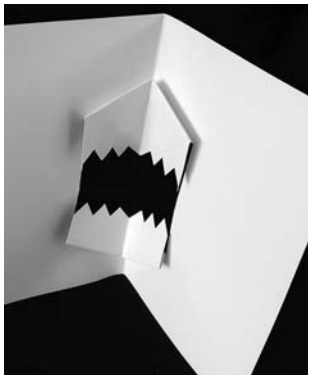
図30. 例「ガウー」

⑷　第４段階　簡単に切ってうごくもの

題材名「にょきにょき」

「にょきにょき」は，画用紙を円形に切り，さらに渦巻きに切り，２つに折ったが用紙に挟み，端をのり付けするものである。これは，全員できた。「へび」のイメージをもつものであるが，そればかりでなく，「回転」や

図31.「くるくる」

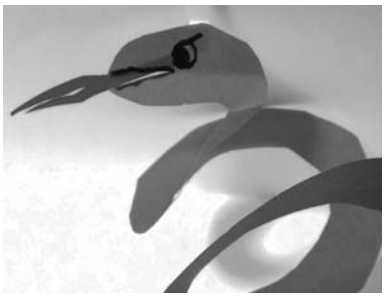
図32.「ヘビと舌」

「渦巻き」があり，「にょきにょき」というより「くるくる」（図. 31参照）とネーミングしていた。「へび」を作った子どもは「舌」まで作って，それらしくして，見せてくれた（図. 32参照）。

⑸　第５段階　家で持ち帰って切って，折って作るもの

題材名「じょきじょき」

この教室が，ここで終わって，子どもたちが自宅に帰った時，さらに興味を展開することによって，活動が持続するねらいであるが，ここでは，お土産として持ち帰ることに，喜びの表情を表した。今回，手渡したのは，図21. のものである。結果は次年度にも参加する，持ち帰った子どもたちに期待したい。

⑹　まとめ

今回も応募者が予定よりも多く，さらに参加した子どもたちが多いことに驚かされた。多くの子どもたちは「工作」に興味をもっていることが分かる。子どもの成長を促すための「工作」は大変重要な役目があり，有益な行為だと考える。本来，何もない状態から，子ども自ら材料を選択し，自分の思う物を作ることが，創造性および創造性としての在り方が，成長過程において，もっとも望ましい姿勢である。

「工作」の出来，不出来を見るのではなく，工作の「場」を与えることである。現在では，住宅事情や塾・習い事などで，自分の思うものを作る場所や時間が制限され，また，その機会も少ないようである。このようなことから，本研究でのプログラムは現在のニーズに乗ったものとして「場」を考えたものである。その特徴を捉えるな

らば，前述しているように，住宅事情や塾などで，自分一人で事を始める機会が少ないため，１つの集団として成立たせている「教室」は，集団とともに個を育てる意味がある。こんにちの子どもたちは，集団の中で自分を見つける場合が多い。小学校の教室とは違った「縦割り」の幅のある年齢の「教室」として，また，ひとつの導き方として，日頃する事のない，興味をそそるものに水を注いであげる役割ではないかと考える。言い換えれば，最初から何もない状態ではなく，ちょっとしたテーマを提案してあげることではないかと考える。これは，ある条件を子どもたちに提示し，限られた範囲で，その中から，小さな発想とともに工夫を見出す。また，自分の行為と自分と違った発想，まわりの同年齢の子，年下の子，年上の子などの行為，それが少しのヒントにより，しだいに拡大していくことを望むわけである。つまり，小さな想像から大きな創造へと導くものと考える。本研究の意図とすることは，そこにあり，ちょっとしたものから，複雑なもの，最後にやさしい，自信がつくものの，最後に繋がり，継続するという流れである。このようなことが，子どもたちの成長発達する過程で支援できるとしたひとつのプログラム研究である。この支援は，紙工作が理解できれば，誰にでも支援できる内容だと考える。

訳注

※１．文化協会は，昭和59年（1986）に古賀市の芸術・文化発展のために有識者による発案により組織化されたものである。古賀市の文化・芸術推進の行事に関することを委託し，事業を実行する機関でもある。文化協会は日頃に於いて，一般の市民を対象に，歌や踊り，料理教室，美術など多彩な教室設定と美術展や芸術祭等の催しを行なっている。

※２．地域の子どもたちが，異年齢集団における遊びを中心とした活動を通して，人とのつきあい方や，社会のルール，他者を思いやる気持ちを育み，生きる力を身につけることができるように活動している。

参考文献

・石原英雄，橋本泰幸／編著「工作工芸教育の新展開」p. 71-86ぎょうせい1986
・中野隆二，村田利裕／共著「造形コース」p26-27日本色研事業　1988
・デビッド・A・カーター，ジェームズ・ダイアズ「ポップ・アップをつくろう」大日本絵画　2004
・橋本泰幸，福田隆真／編著「美術・工芸教育の理論と実践」福村出版　1991
・斉藤清，中村亨，宮脇理／編著「図画工作科教材研究」建帛社1985